



経営が苦しい頃、牛尾会長を迎えての現地幹部会議。右端（半分切れている）が買収先の創業者であるアンゲラ氏、その隣が牛尾会長、一人置いて筆者。

# ミュンヘン暮らし

菅田 史朗  
ウシオ電機 取締役社長

入社後技術部門にいたが、突然秘書室へ異動。その三年目、ドイツの電球メーカーの買収交渉を担当し、約一年の紆余曲折を経て1990年秋、調印にこぎ着けた。一カ月後、牛尾会長から「じゃあ君、行つて来い」と言われ、社員約三百人の中に日本人ただ一人、ドイツ語も出来ぬままミュンヘンに赴任した。

湾岸戦争の影響で出国禁止令が出たため、日本からの出張者が誰も来ない一年が過ぎた頃、主力商品の売れ行きが急激に悪化。さらに、社運を賭けた生産自動機の完成が遅れて、着任二年目は大赤字になった。この時、読めもしないドイツ語の「倒産処理」の本を買い、退職後の身の振り方に頭を巡らせた。ただ、本社から二度にわたって自動機プロジェクトの中止勧告が来たが、何とか説得して、やり続けた。

三年目になってようやく自動機が完成し、職場再編も終えた。並行して進めていた新製品の大口販売契約もまとまったところで、帰任命令。もう一年いれば黒字決算が見られるのにと未練もあったが、一定の達成感を抱いて帰国した。代表幹事秘書役として経済同友会に出向する二年前のこと

だ。幸い買収前以来の累積赤字は、後任社長以下の努力で先ごろ解消したし、件の自動機は今も健在で良く働いている。

私はこの駐在勤務を通して、経営全般にわたる幅広い経験をさせて頂いた。また趣味のガーデニングはバイエルンの窓辺を飾る花々に感動して始めたし、帰国三年後に建てた自宅に地下室や全館集中空調を設けたのは、当地で快適さを実感したから。「駐在中に一生分の欧州旅行をしよう」と、年に何度かの長期休暇にせつせと旅行したせいか、家族の絆が強まった。家内は今も続く親しい友人を得たし、子供達のその後の進路は、この間に身に付けた語学と国際性で豊かになった。三年半のミュンヘン暮らしは、実に多くのものを一家に与えてくれた。

